ピクミン使いが行く

並道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ピクミン使いが行く

【Ｎコード】
Ｎ６７５９Ｖ

【作者名】
並道

【あらすじ】
ピクミンつかってがんばるお話。処女作なのでかなりの駄文。ひどいところがかなりあるので温かい目で見守ってください。

プロローグ（前書き）

感想の返信はきついかも、とにかく駄文だけど温かい目で見てね

プロローグ

白い部屋、何もない、ただ真っ白い

これはまさか

「転生フラグキターーーーーーーーーー！！」

死んだ記憶はないがもうこの状況は期待してＯＫだよな？

「神様転生準備は整っています。いつでもカモン」

「いや、少しは慌てふためけよ。見てて楽し「あなたが神様ですか」聞けよオイ」

もちろん聞く気はない

「もうこれは転生しかないですよね？間違って俺殺しちゃったんですよね？俺転生させたら許す」

「はいはい、わかったよ」

やった！もうこれで人生勝ち組決定だ。どんなチートにしようかな？ハーレム作りたい！

「じゃあ、まず魔眼ぜｎ「貴様に選ぶ権利などない」Ｗｈｙ？」

「どうせ、ハチャメチャな能力お願いするんだろ？つまらんし」

けちくせえ

「まあいい、じゃあ転生先はゼロm「それも俺が決める」もうさっさとしろ」

「転生先は、じゃじゃーーーん『マブラヴ』だ」

さっきから神のテンションが意味不明、だが『マブラヴ』ということは

「『マブラヴ』とか死亡フラグ満載じゃねーか。もちろんチートもらえるんだよな？」

「当たり前だろ、お前に与えるチート能力は・・・・・

なんだろう、『マブラヴ』だから生産チート系かな？

じゃじゃーん『チートピクミン使い』だ「おいちょっと待て」なんだいったい」

「じゃじゃーんじゃねえよ、おれにいったいどうやって生き残れと？

あれだろピクミンて小さい弱弱しいやつだろ？」

「いやだからチートピクミンだって」

「チートだろうが所詮ピクミンだろうが。いったいどうｓ「うるさい、いってこい」わお」

テンプレどうりに穴があいて落ちていく俺

「説明不十分すぎだろ、チートピクミンてなんだ？確実に死ぬな俺」

ピクミンじゃ落下どうにかできないだろ

だんだん見えてくる地面を見ながらそんなことを考える俺だった

プロローグ（後書き）

まあ駄文だ。この時点で我慢できない人は［戻る］をクリック

一話（前書き）

ピクミンとのふれあい

一話

気がついたら寝ていた。もちろん地べたで、うつ伏せなので「知らない天井だ」も言えない

つーかどうやって着地したんだ？

まあ、神が何かやってくれたんだろ

ということで

「ここどこ？」

「テンプレなら横浜基地の近くのはずなのだが、見渡す限り基地らしき物はない

が　オニヨンはあった。はあ、マジかよ。マジで『ピクミン使い』かよ。信じられねえ」

そもそもピクミンでＢＥＴＡ倒せるのかよ

もはや不安しかない

「まてよ、ピクミンはピクミンでも『チート』ピクミンだ。神がチートというんだ、なにかすごいピクミンなんだろう」

期待を胸にオニヨンへ向かう俺。よくよく考えればピクミンは数がすごく多くなった記憶がある

物量チートのＢＥＴＡに同じく数の多いピクミンしかもチートピクミンである。相性はよいのではないか？

しかし、俺は思い出してしまった

「ピクミンて同時に百体までしか外に出せなくなかったか？もしそうだとしたら物量チートですらないマジ無理げーだろ」

ため息しか出ない。とにかくオニヨンをみてみた

チートオニヨン　赤ピクミン１００，０００，０００
紫ピクミン１００，０００，０００
白ピクミン１００，０００，０００
黄ピクミン１００，０００，０００
青ピクミン１００，０００，０００

たいれつ　０／０

数やべえ　合計五億のピクミンとか笑えない

だがどんなにピクミンがいても百匹しか連れ出せないのなら意味がない

いったいどれだけのピクミンを連れ出せるのだろう

全部出せました

五億匹のピクミンとかやばい。俺の膝ぐらいのピクミンが五億匹並んでいる。こわっ

まあいい、確かにこれだけの数がいれば戦力になるだろう。ピクミンじゃなければ

ピクミンが何匹いようが突撃級とか殺せそうにないだろ

本当にどうしよう

オニヨンが手のひらサイズになったことに驚きながらも周りを散策する俺

というかところどころで戦車級とか闘士級らしきものを見かけるんだが

そして向かってきてるんだが、そりゃピクミン五億匹もつれてりゃ見つかるよな

逃げろおおおおおおおおおお

かこまれました　もう無理ぽい

だがあきらめるな俺

「オ〇マーよ俺に力を貸してくれ。ピクミンいけえええええええええ」

飛び掛るピクミンたち、ＢＥＴＡどもめチートピクミンの力を思い知れ

まあ無理だよね俺より大きいＢＥＴＡにピクミンたちがかなうわけがない

「と思っていた時期が僕にもありました。」

すごいことになっている

赤ピクミンがぶつかったＢＥＴＡは瞬く間に炎に包まれ燃え散り

紫ピクミンがぶつかったＢＥＴＡは押しつぶされ地面にめり込み

白ピクミンがぶつかったＢＥＴＡは溶けはじめ

黄ピクミンがぶつかったＢＥＴＡは雷みたいな轟音の後完全にこげていて

青ピクミンにいたってはぶつかったＢＥＴＡが凍っている

「もうこれピクミンの姿を借りた別の何かだろ」

たしかに俺のピクミンはチートだった

一話（後書き）

チートピクミンである
この小説のピクミンは最強のみちを突っ走ります
黄色とか青には突っ込みどころがあると思いますが
すいません、どうしてもピクミンをチートにしたかったんです

二話（前書き）

オリ主の原作知識
・宇宙人に人類襲われてる死亡フラグ満載の世界
・宇宙人多すぎて明らか人類オワタな世界
・ゆうこさんぱねえ
・ハーレム野郎がいる
不安すぎて神様が追加した知識（本人は気づいていない）
・ＢＥＴＡ関連の知識

今つれだしているピクミン　　全種類一万匹ずつ

二話

ピクミンは倒した生物オニヨンに回収させることで新たにピクミンの数を増やすことができる

よって倒したＢＥＴＡを回収させることでどんどんピクミンの数を増やせるのだ。

それにくわえてピクミンはＢＥＴＡ１体につき１の増加ではなく１：３もしくは４ぐらいで増殖していく。

つまりピクミンの物量チートはＢＥＴＡが多ければ多いほど増していくのだ。

しかも、このピクミンたちはチートピクミンである、余裕でＢＥＴＡを屠れるのだ。これだけでかなりのチートだ。

もうすでに何体ものＢＥＴＡと遭遇して倒し、ピクミンを増産している。本人は無傷でだ。

つまり何が言いたいのかというと

・・・・・われらが主人公は、調子に乗りまくっているのだ。

ピクミンが強すぎる

はじめはこんな力をよこした神は頭が腐ってると思ったが

このチートはいい。俺ｔｕｅｅｅはできないがわが軍は圧倒的ではないか！ができる

何より癒される

無双もできるしもう最高

そういえば、新しいピクミンができた

オレンジピクミンだ

まだよくわからないがオレンジピクミンは何でも噛み砕けるらしい

本人が言っていた

いや突然どうしたかと思うかもしれないが俺はピクミンと意思疎通ができる

なぜかわからんができた

まあ何を言いたいのかがわかる程度のあいまいなものだが

永遠と独り言を言い続けなくてすんだのはよかった

つーか人影が見えん。ここどこ？

～散策中～

廃墟ばっかりだ。いいかげんピクミン以外のやつに会いたいんだが

所々で会うＢＥＴＡがうざすぎる

もういっそのことハイヴおとすか？

そうすれば人類の救世主として祭り上げられて

きゃあ、かっこいい付き合ってみたいなｋ（ｒｙ

チートなピクミンもってる俺は最強だ・・・つまり不可能などない

ハイヴ落とすことを決意

というわけでハイヴを探そう

廃墟で拾ったイスに座りピクミンに持ち上げさせ命じる

「全速前進」・・・ビュンッ「ぼしゅあ」

ピクミン早すぎだろ！一気に加速したせいで強烈なＧがかかり押しつぶされる

おもわず間抜けな声が出てしまった

「ピ、ピクミン・・・ちゅ、ちゅとっぷ・・・」

とまらん・・！

やばい出る、なんか出ちゃう・・！

頼む止まってくれえええええ

やっととまった。どうやら横坑(ドリフト)をみつけたらしい・・・ゲロッた

もう無理しぬる

おのれピクミンめ！いったい何キロ出したんだ！

なぜあの体であのスピードが出せる

衝撃波でＢＥＴＡが吹き飛んだときは軽く意識を失ってしまったぞ

とにかく横坑(ドリフト)からＢＥＴＡがたくさん出てきている

いけピクミンたち！やつらにわれらがピクミン軍団の恐ろしさを思い知らせてやるのだ！

～数時間後～

「ＢＥＴＡさんすんません。自分調子に乗ってました。謝るんでどうか見逃してくんろ。おねげえします。」

やあみんな・・・やばいよ　ＢＥＴＡさんマジぱねえっす

いやはじめはよかったんだよ

ピクミンがＢＥＴＡにぶつかって倒したやつを別のピクミンがオニヨンに持っていって

増殖したピクミンを別のピクミンが引っこ抜いて増援として（以下略

オリ〇ー先輩と違ってピクミンとの完璧なコミニュケーションの取れる俺だからできることだ

このまま反応炉まで行くぜ

とか言いながら横坑（ドリフト）突き進んでたら

挟み撃ちされた

なんて俺は馬鹿なんだ

がんばって広場（ホール）まで突き進んだのはいいけど

完全に包囲されて今この状況

無理無理、天井からも来るし対応できないよ

俺オワタ

調子乗ってハイヴ落とすとか考えるんじゃなかった

彼は気がつかない。

ピクミンたちがＢＥＴＡの動きを学び、自律行動をとり
圧倒的な速度でＢＥＴＡたちを倒していることを

彼は知らない。

何千万というピクミンを犠牲にしながらも
すでにハイヴ内のＢＥＴＡはほとんど討ち取られているということを

彼は理解していない。

ただひたすらに主人のために命を賭けるピクミンの忠誠心を
そして主人の悲鳴を聞いたピクミンが

更なる進化を遂げようとしていることを

二話（後書き）

短くてすいません。

ピクミンはチートです。
この小説で一番強いのはピクミンです。
まあさすがもうすでに何匹も死んでいますが。
数がたくさん増えるので主人公が気づかないだけです。
というか彼もチートという設定です
まあ戦闘系チートではないので相変わらず最強はピクミンです

作者は原作やったことないので矛盾点などたくさんあると思いますが
どうか温かい目で見守ってください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6759v/

ピクミン使いが行く

2011年8月11日15時37分発行